

LCC新島塾・講演要旨

同志社女子高等教育に多大の貢献をした
「Miss Mary Florence Denton」



日時：平成23年1月17日

講師：LCC広報担当

LCC講演要旨 (2011年1月例会) 抜粋編

テーマ：同志社女子教育と Miss Denton、デントン先生

1. はじめに—Miss Denton について

- ・本日は 昨年4月の新渡戸稲造に引き続き、ミス・デントンというアメリカ人女性についてお話し致します。 *新渡戸の妻 Mary (日本名萬里)は Miss Denton の親友
- ・さて皆様、ミス・デントンって誰?と聞かれて即座に答えられる人は同志社人でも女子部関係者以外では案外少ないのではないのでしょうか?
- ・同志社女子大学は現在、薬学部を含み5学部10学科、学生数6,200人という日本有数の総合女子大学に発展しています。
- ・女子大の入試難易度ランキングでは常に上位を占め、人気抜群の女子大ですが、同志社の女子教育を語る上で忘れてはならない重要な人物、それが本日お話しする Miss Mary Florence Denton です。
- ・彼女は1888年(明治21年)31歳で来日してより1947年(昭和22年)に永眠するまでの59年間、第2次世界大戦中も帰国せず女子部構内に居住し、その全生涯を同志社の女子教育に注いできました。
- ・女性宣教師として創設期の同志社女学校に着任したのは8人目でしたが、女子部のどの宣教師よりも長く、どの宣教師よりも熱烈に同志社と日本を愛した人でした。
- ・その貢献に対し二度の叙勲に輝いていますが、召天直後の1948年(昭和23年)には女性に与えられる最高の栄誉、勲3等瑞宝章を贈られました。
- ・しかし、彼女にとっては多くの人によって用いられた彼女への褒め言葉「同志社の宝」が最もふさわしい栄誉だったのではないかと思います。
- ・Miss Denton の生涯にわたる同志社女子部への献身は、新島襄が同志社全体のために果たした役割と並んで、我々同志社人がいつまでも記憶に留めておかなければならない重要な歴史的事実なのです。

2. Miss Denton と同志社の出会い

- ・彼女は「世界で一番良い国は日本、日本で一番良いところは京都、京都で一番良い学校は同志社、同志社で一番良い学校は女子部だ」というのが口癖でした。
- ・では一体、彼女はどのようにして同志社を教育の場として選び、「同志社の宝」と呼ばれる存在になったのでしょうか?
- ・Miss Denton は、1887年カリフォルニア州パサデナの小学校の校長時代に、日本から休暇で帰国中の同志社の教師でアメリカ人の宣教師マルクス・ゴードンと出会いました。
- ・そして彼から、アメリカで多くのキリスト教徒をロマン溢れる説話で感動させた新島襄という人物と、彼がアメリカ人宣教師、ジェローム・デイヴィスと共に京都に設立したばかり(1875年・明治8年)の魅力的な学校、同志社のことを初めて聞きました。

*同志社女学校の設立は1876年

- ・当時彼女は、キリスト教婦人禁酒同盟の活動を通じ多くの活動家と交わっていましたが、女性に参政権が与えられれば女性の地位は向上し、社会を大きく改革できるとの強い信念を持っていました。
- ・ゴードンから同志社で働くことを勧められた彼女は、キリスト教による教育を通じて女性の地位を向上させ、日本に一大キリスト教国を建設しようと考え、1888年に家族や友人の反対を押し切って来日しました。

3. 教師としての Miss Denton

- ・同志社における Miss Denton には大きく分けて二つの顔がありました。
- ・その一つは教師としての顔です。
- ・彼女は当初、聖書のほか、英語、地理、動物学、植物学、天文学、科学、料理法、看護学など多くの科目を教えていました。（*学校の規模が拡大後は、英語、料理、聖書）その間多くの逸話が生徒たちの間に伝えられてきました。
- ・学生が授業の予習をきちんとして来なかった時は本当に怖い教師でしたが、よく勉強してくると、大いなる喜びを一杯に示してくれた先生でした。
- ・無気力で、授業に無関心な生徒にはとても我慢ができず、そのような生徒には「あなたたちのご用は何ですか、勉強、勉強、勉強」というのが口癖でした。
- ・宿題を怠けるものや、教会、礼拝の出席に熱心でない生徒は常に彼女を恐れていました。
- ・しかし、彼女の薫陶を受けた多くの生徒達は、卒業してからも長く彼女を忘れることができませんでした。

- ・なぜ彼女はこんなに生徒の心をとらえたのでしょうか？それは彼女が徹頭徹尾生徒を愛する先生だったからです。
- ・彼女と生徒達を巡るエピソードについては枚挙にいとまがありませんが、ここでは一つの感動的な逸話を紹介します。
- ・ある生徒が急に発熱して腸チブスと診断されて入院する際、彼女は終始担架につき添い、入院後も毎日アイスクリームを作って運びました。
- ・隔離病棟のため病室に入ることを許されないと、看護婦に「私うつりません。生徒のことを考える心で黴菌が逃げていきます」と押し問答をしているのをその生徒の母親が目撃し、「実の親でも及ばない」とその母親が涙を流して感謝したエピソードが残されています。

4. 建設者としての Miss Denton

- ・彼女の二つ目の顔は建設者としての顔です。
- ・女子部のキャンパスに立っているほとんどの建物は彼女の熱意の結果建設されて建物です。
- ・ご自分のためには「これ以上に質素な生活はない」というほどに切り詰めた生活を送りながら、同志社に必要な建物を作る資金集めのために国の内外のお客様を自宅に迎え、手料理でもてなしました。
- ・彼女の住居デントンハウスは、まさに世界中からの訪問者を迎えるサロンの役割を果たし、「ホワイトハウスを除いて最も興味深いパーラー」と評されました。
- ・Miss Denton の集めた寄付金から建築された建物は、「最初の家政館」、「平安寮」、「デントン・ハウス」、「静和館」、「ジェームズ館」、「家政館」、「プリンプトン館」など多数に及びますが、何といっても有名なのは「栄光館」です。

5. 栄光館（ファウラーチャペル）

- ・栄光館は、私の在学中は入学式と卒業式が行われた思い出深い建物ですが、栄光館建設の裏には Miss Denton を巡る大変感動的なエピソードがあります。
- ・実は、Miss Denton は来日する時ファウラーさんという立派な青年と婚約していました。
- ・アメリカを出て何十年かたったとき、アメリカから一人の老紳士がやってきました。
- ・彼は自分が働いて一生かかって貯めたお金を「どうぞ神様のために使ってください」と言って彼女に差し出しました。その人こそ彼女が若い日に別れた婚約者ファウラー氏でした。
- ・別れてから 50 年後でしたが、彼女と同じくファウラー氏も一生独身で過ごし、最後に一番大事なものを彼女のために捧げました。

- ・そのお金を基にして（*1/3とされていますが）建てられたのが今の栄光館で、そのため栄光館は別名ファウラー・チャペルとも呼ばれています。
- ＊このエピソードは長く定着した逸話で、実際のファウラー氏像は少し異なるようですが、ここでは多くの関係者が長く共有し、感動したエピソードを披露させて頂きました。

6. 相国寺・長得院（デントン寺）

- ・Miss Denton は現在、同志社と隣接する相国寺長得院に眠っています。
- ＊若王子の同志社墓地にも分骨
- ・クリスチャンがなぜ由緒正しき京都五山の一つであり、禅宗の総本山相国寺の塔頭に埋葬されているのか、不思議に思われる方も多いかと思います。
- ・話は同志社設立時に遡りますが、1875年8月に新島襄が京都府に「私塾開業願」を提出したときから、「耶蘇教徒の新島襄が耶蘇教の学校を京都に作るらしい」との噂が僧侶たちの間に流れ始めました。
- ・それ以来、僧侶たちの京都府への苦情、陳情、および同志社への直接的な妨害は日ごとに強まり、新島やデイヴィスの家には連日石が投げ込まれました。
- ・その背景には明治政府のとった廃仏毀釈政策（*神仏の分離・神道の国教化）があり、この流れの中で耶蘇を排斥する運動が展開されていました。
- ・この様な同志社に対する仏教徒側の激しい攻勢の中にあって、同志社と相国寺の間に争いがあったという事実は残っていません。
- ・耶蘇教排斥運動の中にあって、このような関係が成立した背景には、当時の相国寺管長、荻野独園禅師の存在がありました。
- ・新島襄に師事した最後の直弟子、足利武千代氏の記述によれば、同氏は7歳のころ通学の途中、今出川御門を通り同志社に向かう新島襄と度々出会ったそうです。
- ・その都度挨拶を交わすうちに武千代氏はすっかり新島襄のファンになり、同志社に入学したいと思うようになりました。
- ・しかし、足利家は相国寺第一の檀家で、その息子が耶蘇教の学校に入るとはとんでもないと、耶蘇教嫌いの老僧・禅師たちは口を揃えて反対しました。
- ・これに対して相国寺長老の独園禅師は、「新島という男は偉い人だ。もし新島の感化により武千代本人が自発的に改宗を希望すればそれで結構、耶蘇を排斥する必要は更になし」と断言し、この鶴の一声で武千代の同志社普通学校への入学が決まりました。
- ・Miss Denton は昇天近き日に、遺骨は愛する同志社の近くに埋めてもらいたいという希望を洩らされ、相国寺の塔頭寺院・長得院にMiss Dentonのお墓が造られましたが、その背景にはこういう相国寺の懐の深さがありました。
- ・長得院はこれ以降「デントン寺」と呼ばれるようになりましたが、同寺の境内からは朝には読経の音が聞こえ、夕べには讚美歌が流れることも珍しくありません。
- ・現在、世界各地では宗教の違いにより骨肉相食む争いに明け暮れていますが、宗教の壁を越えて、異端の墓を境内に受け入れた、相国寺のこの懐の深さを世界の宗教人は是非見習ってほしいものだと思います。

8. おわりに

- ・前回新渡戸稲造のお話の際、ドイツの鉄血宰相ビスマルクの「賢者は歴史に学び、愚者は体験に学ぶ」という言葉を紹介しましたが、この言葉は時代を超えいつまでも語り継がねばならない真理だと思います。歴史に学ぶということは、先人の知識と経験に学ぶことです。

- ・しかし、翻って日本企業の現状をみると、企業経営者がこの真理をどの程度理解し、実践しているか疑問を感じずにはられません。
 - ・残念ながら自分の過去の成功体験に固執し、リスクテキングを避けて安全運転に終始する様な企業経営者が多く見受けられますが、これらの経営者はまさに「体験に学ぶ愚者」です。
 - ・私も多少の株を持っていますが、無配企業の企業報告書ほど、その原因をリーマンショック以来の経営環境の悪化などに強く求めているような気がします。
 - ・数ヶ月前の日経新聞に上場企業の「一部・二部入れ替え制」を提案している識者がいましたが、これはなかなか面白いアイデアで、実際にこれを実施してみれば企業経営者の行動はかなり変わるのではないかと思います。
-
- ・一部上場企業から二部上場企業に落ちることは、経営者失格の烙印を押されることです。それは株主総会で追及されるよりも遥かに大きい社会的な信用失墜につながると思います。
 - ・小生の娘婿が先日韓国に出張するというのでその理由を聞いたところ、「自社で検討中のIT管理システムについて、韓国の実態を勉強に行く」とのことでした。
 - ・後で話を聞いてみると、その技術はもともと日本企業が開発したもので、その企業では経営トップの理解を得られず、韓国で具体化したものとのことでした。
 - ・サムスン電機は、いつの間にか日本の総合電機会社がか束になっても敵わないほどの利益を生み出す世界有数の巨大企業になっていますが、これはリスクテキングを恐れない企業体質のなせる業です。
-
- ・司馬遼太郎は、かつて小学6年生の国語教科書に「21世紀を生きる君たちへ」と題する文章を書いています。この中で「歴史には将来への栄養素がいっぱい詰まっている」と述べています。
 - ・話はMiss Dentonから大きく逸れましたが、私たちは単に自分史の中で歴史を見るのではなく、幅広く歴史を検証して、「脱ぎ捨てるもの」と「栄養源として未来に生かすもの」とを識別する見識を持ちたいものだと思います。 以上

* **アメリカンボード** (American Board of Commissioners for Foreign Mission)

北米最初のキリスト教海外伝道組織。会衆派系。日本への宣教師派遣はプロテスタント他派に比べて10年遅れたが、関西を中心に勢力を拡張、来日したプロテスタントの外国伝道組織27のうち、宣教師数・日本人受洗者数・神学生数・日本人伝道者数・日本人の献金額において最大となった。同志社設立資金として新島襄に5,000ドルを資金提供、J.D. Davisなど宣教師を多数派遣

* **キリスト教婦人禁酒同盟**

当初は禁酒運動を活動の目的としていたが、その後禁煙、売春、麻薬撲滅、婦人参政権獲得、男女平等賃金など女性のための社会改革を促進する団体として成長した。

* **Eldridge Merick Fowler (1833-1904)**

栄光館ファウラー・チャペルに名を残す篤志家。長い間Miss Dentonの婚約者で、彼女の来日を強く引き止めていたとされていたが、実際は彼とMiss Dentonが初めて出会うのは彼女が最初の休暇で帰国した1900-1901年の間（ファウラー氏67.8歳、彼女は43.4歳）

そのとき彼は2人の妻と死別し、2度目の妻との間の娘Kateと暮らしていた。1901年に父と娘が来日した時、Miss Dentonに求婚したかもしれないとの説がある。

*J. D. Davis

アメリカンボードが派遣した最初の宣教師。同志社開校時の2人の教師の1人（1人は新島襄）来日前にアメリカ南北戦争（1773年～1781年）にも従軍

*足利武千代（1870-1967）

足利銀行頭取。同志社普通学校を経て同志社法政学校卒業。在学中に同志社教会で受洗

*同志社普栄光館とパイプオルガン

- ・ Miss Denton が 50 年以上も同志社女子部のために尽くしたことに對し、彼女を送り出した米国の「太平洋婦人伝道会」は彼女に何か記念品を贈りたいと提案しました。
- ・ これに對して彼女は、同志社の女子学生にパイプオルガンを送ってほしいと要請しました。
- ・ パイプオルガンは当時日本には僅か 2 台しかありませんでしたが、「太平洋婦人伝道会」は彼女の要請を受け入れ、パイプオルガンを日本に送ることにしました。
- ・ でもこの時期、日米関係は最悪の状態にあり、オルガンの部品が無事に日本に到着するかどうかもわからない状況でした。
- ・ また、無事に到着しても日本にいた宣教師の多くが帰国し、パイプオルガンをどのように組み立て、設置するかを知っている技術者は日本にはほとんどいませんでした。
- ・ 幸いなことにまだ日本に残っておられた東北学院の宣教師、ゾウグ博士がパイプオルガンに造詣が深く、同博士の指導のもと、同志社の施設課の人たちの努力でオルガンは無事組み立てられました。
- ・ オルガンのお披露目は同志社女子部創立 65 周年の年、1941 年（昭和 16 年）6 月 6 日で、太平洋戦争が始まる 6 か月前のことでした。

*Miss Denton のお墓

Miss Denton のお墓の隣には、同女史の最後の日まで通訳を務められた星名ヒサさんや、多くの同志社関係者のお墓が並んでいます。因みに Miss Denton の墓石には「50 years Servant to God and Doshisha（50 年間に及ぶ神と同志社のしもべ）」と刻まれています。